9月1日　ヨハネの手紙Ⅰ　5章10～21
「永遠の幸せを目指して」

今日の説教題に「幸せ」という言葉を使いました。ただ、私たちは一人一人別の人間ですから、「幸せ」の受け取り方もそれぞれ違いがあると思います。皆様は、今幸せを感じることができているでしょうか。

心理学では私たちが幸福を感じることができるのは、「誰かの役に立っている」と感じる時だと言われています。誰かの感謝の言葉や態度によって、私たちは「ここにいていい」という安心感と、幸福感を得ることができるのです。私たちのことを認めてくれている、愛してくれている神様によって私たちは幸せを知ることが出来るのです。

一方で、今日の個所で著者ヨハネが言うように、私たちは神様のことをまるで「偽りもの」「嘘つき」であるかのように、誰かに誤解させてしまうおそれがあります。神様のことを信じていると口で言い表しながら、罪なんて何もないかのように振舞いながら罪を重ねていくその姿を誰かが見れば、「こいつの信じている神なんて大した存在ではないんだ」と、あるいは「罪を犯してもいいのだ」と誤解させることになります。そうならないように、日々の言動に気を付ける必要があるのです。

その言動の目的は、隣人のために祈る行動によって、隣人への愛を示すことにつながります。愛することが目的になったその時、愛するという行動自体が相手のためになり、神様のためになっていることを理解し、愛することによって満足できるようになるのです。それこそが、私たちの目指すべき愛の極致であり、イエス様の十字架に示されている、神様が喜ぶほどの愛の業の極みなのです。

私たちの業によって神様が喜んでくれている、それは小さな私たちにとって驚くべき言葉であり、同時に大きな希望の言葉であります。私たちの神様は、いつも私たちに関心を持ち、いつも私たちの祈りに耳を傾け、私たちと共にいてくれる神様です。その神様は、私たちが神様のために生きて、神様のために御言葉を宣べ伝えることによって、私たちの一挙手一投足に「喜んでくれる神」であるのです。それが私たちの神様なのです。それほどまでに、神様は私たちのことを愛してくれているのです。

私たちは、神様の役に立つことができます。神様の望みを実現することができます。その力を、聖霊を確かに注がれているのです。神様を喜ばせ、隣人を喜ばせる人生のその先には、私たちのこの世における幸せが待っています。今ここにいていいのだと、神様に招かれていると実感しながら生きるこの人生は、幸せを実感できる人生だと思います。そしてその幸せは、この世の命のそのあとも、神様のもとでの永遠の幸せにつながってゆくのです。

私たちの業は、ただ神様に仕える自己犠牲だけの業ではありません。神様に仕え、隣人を愛し、神様を愛し、隣人に仕える。互いに愛し合うそのすべての業によって、私たちもまた幸せになることができるのです。その幸福の輪を、共に広げに行きましょう。

今日の説教箇所：ヨハネの手紙Ⅰ　5章10～21

- 10:神の子を信じる人は、自分の内にこの証しを持っています。神を信じない人は、神を偽り者にしています。神が御子についてされた証しを信じないからです。この証しとは、神が私たちに永遠の命を与えてくださったということです。そして、この命は御子の内にあります。御子を持つ人は命を持っており、神の子を持たない人は命を持っていません。
- 13：神の子の名を信じるあなたがたに、これらのことを書いたのは、あなたがたが永遠の命を持っていることを知ってほしいからです。何事でも神の御心に適うことを願うなら、神は聞いてくださる。これこそ私たちが神に抱いている確信です。私たちは、願い事を何でも聞いてくださると知れば、神に願ったことは、すでにかなえられたと知るのです。
- 16:もし誰かが、死に至らない罪を犯しているきょうだいを見たら、神に願いなさい。そうすれば、神は死に至らない罪を犯した人に命をお与えになります。しかし、死に至る罪もあります。これについては、願い求めなさいとは言いません。不正はすべて罪ですが、死に至らない罪があります。神から生まれた人は誰も罪を犯さないことを、私たちは知っています。神から生まれた人は自分を守り、悪い者がその人に触れることはありません。私たちは神から出た者であり、全世界は悪い者の支配下にあることを知っています。しかし、神の子が来て、真実な方を知る力を私たちに与えてくださったことを知っています。私たちは、真実な方の内に、その御子イエス・キリストの内にいるのです。この方こそ、真実の神であり、永遠の命です。子たちよ、偶像から身を守りなさい。